

第1章. 調査の概要

第1節 調査の経緯と目的

調査の経緯 齋藤家は、幕末から酒類卸売・海運・金融などを営んで財をなし、新潟の3大財閥のひとつに数えられた名家である。当主は累代にわたって「喜十郎」を名乗ったが、旧齋藤家別邸（新潟県新潟市中央区西大畑町）を造営した人物こそ、新潟銀行頭取、貴族院議員を歴任した4代齋藤喜十郎（庫吉、1864～1941）である（以下、本報告書では、特段の注記がない限り、「喜十郎」は4代喜十郎をさす）。

齋藤家の本邸は、新潟市中央区東堀通7番町にあった。しかし現在は失われ、主屋の接客部分が白山公園内に移築されて「燕喜館」として存続するのみで、齋藤家の庭園にかかわる遺構は、この別邸のみである。

別邸の庭園および建築は、伝承などから大正中期から後期には完成したとされ、喜十郎が夏季に別荘として過ごしたことから、「夏の別荘」ともいわれた。しかし本別邸は太平洋戦争終結後に進駐軍により接収され、昭和20年代以降は所有者の変更にもなつて庭園ならびに建築に改造の手がおよんだ。平成17年には、当時の所有者が条件付き競売物件としたことを契機に市民有志「旧齋藤家夏の別邸の保存を願う市民の会」（現・旧齋藤家別邸の会）による保存運動がおこり、署名や募金活動、市議会への請願がおこなわれ、市長宛に26,379名分の署名簿が提出された。市議会は上記の保存運動を受けて本別邸の保存を採択した。これを受けて新潟市は平成21年に敷地の公有化をはかり、平成23年3月には、市に設置された「旧齋藤家別邸活用等検討委員会」（委員長：東京農業大学教授・鈴木誠）により、庭園ならびに建築についての保存・管理・活用等に関する計画がまとめられた¹⁾。しかし、本庭園については、概略をとらえた現況平面図が存在するのみで、具体的な庭園の保存管理、保存整備の検討が困難な現状にあり、庭園の学術的な位置づけ・評価も不十分な状況にあった。

以上から新潟市は、本庭園の適切な保全にむけて、地割構成、意匠の詳細把握のために実測調査と史料調査をおこない、文化遺産としての価値の立証をおこなうこととした。調査は東京農業大学が受託し、本学教授・鈴木誠は、東京農業大学国際日本庭園研究センターに調査組織を設置。学外専門家にも協力を要請し、

造園史的な観点を基礎とした学術調査を実施することとしたのである。

既往の成果 本庭園に関する既往の成果は、新潟県教育委員会が、県内の庭園の悉皆的把握を実施したものがあり、報告書で本庭園の構成の概要が報告され、庭園作者が「松本庭師」によるものと推定された²⁾。旧齋藤家別邸の会は平成22年に合計3回のシンポジウムを開き、日本庭園史における本庭園の位置づけ、作庭者とされる2代松本幾次郎とその弟の亀吉の作風、本庭園のまちづくりへの活かし方について検討をおこない³⁾、造園家・土沼隆雄氏は、上記の検討を総合的に整理した⁴⁾。さらに、幾次郎の子孫で造園家の松本恵樹氏は、幾次郎の作庭活動における齋藤家別邸庭園の位置づけについて基礎的検討を加えた⁵⁾。

調査の目的 以上の経緯や成果等をふまえ、本調査では、以下の4点の目的を掲げた。

- (1) 庭園造営の歴史的整理：喜十郎の別邸造営の経緯から建造物の建設および庭園の築造過程、作庭者に関して、歴史的な整理をおこなう。
- (2) 庭園の構成・意匠の明確化：本庭園の全体構成と細部意匠の特色について明らかにしつつ、庭園の構成要素である庭石、石造物、植栽、建造物についての形態や種類についても把握する。
- (3) 庭園の文化遺産としての価値の立証：上記の(1)、(2)から得られた知見を総合的に整理し、齋藤家別邸庭園の文化遺産としての価値を立証する。
- (4) 庭園の保存と活用：齋藤家別邸庭園を適切に継承していくうえで、今後、特に留意すべき保存と活用に関する課題を明確にする。

補注および引用文献

- 1) 旧齋藤家別邸活用等検討委員会『旧齋藤家別邸整備活用計画』2011年。
- 2) 新潟県教育委員会『新潟県の庭園（下越・佐渡地区）』1989年。
- 3) 旧齋藤家別邸の会『旧齋藤家別邸の庭園を語る—全3回・庭園シンポジウムの記録—』2011年。
- 4) 土沼隆雄『旧齋藤家別邸庭園』2011年。
- 5) 松本恵樹・鈴木誠「二代松本幾次郎と旧齋藤家夏の別邸庭園」『平成21年度 日本庭園学会研究大会発表要旨集』2009年、pp.23-24。

第2節 調査の対象

旧齋藤家別邸庭園が所在する新潟市は、県北東部(下越地方)に位置する。市の中心部にあたる信濃川河口部は古くから港が開かれ、開化期における開港五港のひとつであり、水運交通の要衝として栄えた。

庭園は、旧市街地であった信濃川左岸側の旧新潟町と右岸の旧沼垂町を連絡する萬代橋(万代橋)から北

に1.2kmほどにあり、日本海に面した寄居浜までは0.7kmと、海浜にほど近い西大畑町に所在する。

庭園の周辺地形は日本海に沿って続く砂丘、斜面地、低地が連なる地形的に変化のある場所で、界限には、旧伊藤文吉家別邸(現・北方文化博物館新潟分館)、高級料亭の行形亭、旧日本銀行新潟支店長役宅(現・砂丘館)など、良質な近代和風建築群が現存し、風情のある景観をとどめている。



図1-1 新潟県における新潟市の位置



図1-2 旧齋藤家別邸庭園位置図 (S=1:50,000)



図1-3 旧齋藤家別邸庭園周辺図 (S=1:5,000)

第3節 調査の方法

本調査は、次の方法と内容により実施した。

(1) 庭園測量調査：新潟市が先行して実施した地形測量の成果をもとにして、精緻な実測をおこない、現状の地形・地割・意匠を詳細に把握した。

(2) 史料調査：本別邸を造営した齋藤家に関する史資料、および築造に関与した2代松本幾次郎および亀吉に関する史資料を中心に収集し、別邸の造営から作庭に至る経緯、その後の変遷などを整理し、本庭園の歴史を把握した。

(3) 技法および材料調査：庭園の現場踏査、作庭痕跡の観察、手測りによる実測をおこない、庭園の様式・構成・意匠に関する技法を明らかにしつつ、石造物、建造物に関する構造形式等について把握した。また、庭石・植栽に関する材料調査もおこなった。

(4) 類例調査：旧齋藤家別邸庭園と同時代に造営された新潟の特色のある近代和風庭園、ならびに2代松本幾次郎や亀吉が作庭をおこなった同時代の庭園について類例調査をおこない、旧齋藤家別邸庭園と比較検討をおこなった。

(5) 学術的評価：上記、(1)～(4)の調査成果を総合的に整理・考察し、造園史を基礎とした観点により、本庭園の本質的価値の立証と、今後の保存・活用に関する課題を明らかにした。

第4節 調査組織と経過

調査組織 今回は、東京農業大学造園科学科の教員と学生、新潟市行政担当者、2代松本幾次郎や亀吉に知見を有する専門家、近代新潟における造園文化に知見を有する専門家による調査隊を編成し、現地調査等を実施した。以下に調査隊のメンバーを示す(所属等は、平成24年2月現在)。

調査総括

鈴木誠(東京農業大学造園科学科教授)

現地調査・史料調査・写真撮影

國井洋一(東京農業大学造園科学科准教授)

栗野隆(同大学造園科学科助教)

鄧 舸(同大学大学院造園学専攻博士後期課程3年)

正田実知彦(同大学大学院造園学専攻博士前期課程2年)

加藤徹(同大学造園科学科3年)

望月法子(同大学造園科学科3年)

土沼隆雄(要松園コーポレーション代表取締役)

松本恵樹(春秋設計工房代表取締役)

調査指導・助言

飛田範夫(長岡造形大学建築・環境デザイン学科教授)

板谷龍二郎(マヌ都市建築研究所代表取締役)

コーディネーター

今野誠(新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課)

調査の経過 本調査は、以下の日程でおこなった。

平成23年9月23～27日

・現地調査・写真撮影・打ち合わせ(飛田・國井・栗野・鄧舸・正田・望月・土沼・松本・板谷・今野)

平成23年10月21～23日

・現地調査・史料調査・打ち合わせ(栗野・加藤・土沼・松本・今野)

平成23年12月26～27日

・現地調査(鈴木・栗野)

第5節 報告書の作成

報告書の執筆は、調査にあたった本学教員、および本庭園にかかわる専門家等により、以下のように分担しておこなった。

第1章 栗野

第2章 第1節 今野

第2節 松本・土沼

第3章 第1節 栗野

第2節 土沼・松本・栗野

第3節 松本

第4節 土沼

第5節 正田

第6節 板谷

第4章 第1節 國井

第2節 土沼

第3節 松本・正田

第4節 栗野

第5節 土沼

第5章 第1節 栗野

第2節 栗野

第3節 土沼

口絵・巻末写真は東京農業大学准教授・國井洋一、本学大学院・正田実知彦が担当した。巻末図版は春秋設計工房・松本恵樹が作成した。報告書の編集は、本学造園科学科教授・鈴木誠の監修のもと、同助教・栗野隆がおこない、正田実知彦がこれを補佐した。

第2章. 旧齋藤家別邸庭園の歴史

第1節 所有者の変遷

前史

砂丘の松林 新潟市の中心市街地である古町周辺地区は、江戸時代は新潟町と呼ばれた湊町であった。この町と日本海との間には、成長を続ける広大な海岸砂丘が続き、町に飛砂の害をもたらした。そのため、新潟町では宝暦年間（1751～64）以降、砂丘に松を植えて飛砂を防ごうとした。こうして造成が続けられた砂防林は、嘉永4年（1851）に幕府直轄の「御林」に指定される。現在、旧齋藤家別邸や新潟大神宮のある付近は、このとき「四番御林」とされた¹⁾。

文久元年（1861）、新潟町年寄役で寄居白山外新田の庄屋を兼務していた小田平右衛門は、この御林のうち、窪地で木の育ちが悪い場所の開発を出願した²⁾。開発された土地は、明治時代も小田家が所有していた。**堀田屋（堀田楼）** 行形亭は、元禄年間（1688～1704）の創業と伝わる老舗料亭である。元治元年（1864）の『越後土産』には「松原 行形や」として、砂丘の松林の中に離れが点在する様子が描写されている。

その後、明治10年（1877）の『新潟美知の枝折 細見案内絵図』には、御林稲荷の並びに「いきなり屋」「堀田屋」という2軒の料理屋があり、「いつも庭内美をつくせり」と記されている。この堀田屋（堀田楼）という料理屋は、行形亭の西隣、すなわち旧齋藤家別邸のある場所で営業していた。行形亭同様、庭園の美しさで知られていたことが分かる。

銅版画「新潟堀田楼真景」（年不詳）からは、池と滝のあるその庭園の姿をうかがうことができる。

島清（島清館） 明治26年（1893）8月14日、東堀・西堀と新堀・広小路堀に囲まれ、新潟の花街として繁華を極めた一画がほぼ全焼する火災が発生した。このとき、西堀前通8番町で本間清吉が営業していた料理屋・島清楼も全焼する。この島清が、同年内に堀田楼の建物を買収して西大畑町に移転し（堀田楼は廃業）、庭園・建物の補修を経て、翌年3月に開店した³⁾。

週刊紙『新潟友友』の記者・山川健は、明治45年（1912）5月に刊行した著書『新潟』⁴⁾で、以下のように島清（島清館）の様子を紹介している。

「西大畑町に市塵を避けた所で、行形亭の隣りである、庭園の美なる事は鼻負の客からは、行形亭に劣

らぬと稱されて居る、庭石の配置や、樹木の手入等申分もなく、閑寂の裡に、旅情を慰め得る設備は遺憾なく整ふて居る、鳥國の喧騒なるを避けんとする人は、此家に遊ぶも面白からう。」

島村医院 それから間もない大正元年（1912）12月、南浜通2番町で開業していた元軍医・島村信司の医院が、この島清館の跡に移転した⁵⁾。同5年（1916）の『新潟県総覧』⁶⁾には、以下のように記されている。

「西大畑町の病院は西に山を脊ひ松樹參差・池水清透、四時の景に富める邸内に病室を點在せしむるの設備にして、同病院の名爲に一層高し。」

坂口安吾の生家 この別邸の西隣には、衆議院議員・新潟新聞社社長を務め、漢詩人としても知られた坂口仁一郎（阪口五峰、1859～1923）が住んでいた。その子として明治39年10月20日に誕生したのが、後に『墮落論』・『白痴』などを著して流行作家となった坂口安吾（1906～1955）である。彼は自伝小説『石の思ひ』⁷⁾で生家の様子を以下のように描いた。

「私の生れて育つた家は新潟市の仮の住宅であつたから田舎の旧家ほどだだつ広い陰鬱さはなかつたけれども、それでも昔は坊主の学校であつたといふ建築で、一見寺のやうな建物で、二抱へほどの松の密林の中にかこまれ、庭は常に陽の目を見ず、松籟のしゝまに沈み、鴉と梟の巢の中であつた。」

安吾は大正11年（1922）に東京へ転居するまで、この家で暮らした。その翌年に坂口家は西大畑町から転居し、元の家は同14年（1925）に取り壊されて道路となった⁸⁾。

齋藤家別邸

齋藤家の来歴 『新潟県総覧』が刊行された大正5年（1916）、既に4代齋藤喜十郎（1864～1941）は別邸建設に向けて土地の購入を始めていた。その後、建物と庭園の造営は、同9年（1920）まで続いた。

齋藤喜十郎家は、東堀通7番町に居を構え、新潟の三大財閥⁹⁾のひとつに数えられた名家である。屋号は「三国屋」で、その先祖は越前国三国港から移住したと伝わる。また商標から「山三（ヤマサン）」と呼ばれた。家紋は「丸に剣片喰」である。

2代齋藤喜十郎 この家が急成長するのは、2代喜十郎（庫之丞、1830～1904）の時代である。彼は若く

して家業の清酒問屋を継ぐと、庄内の銘酒を直接仕入れて販路を開拓し、また自家製造の清酒・焼酎を北海道へ移出して莫大な利益を得た。さらに明治時代に入ると、北前船経営に本格的に取り組むようになり、越後の米を瀬戸内・畿内や北海道・樺太へ移出した。また、明治7年(1874)に新潟川汽船会社を設立、新潟-長岡間に蒸気船「魁丸」を就航させた。

明治18年(1885)、2代喜十郎は佐渡の資産家と組んで、新潟と佐渡を結ぶ越佐汽船会社を設立し、「度津丸」を就航させた。当初、その本社は佐渡に置かれていたが、同23年(1890)に2代喜十郎の養子・庫吉が社長となり、翌年には新潟市に本社を移した¹⁰⁾。同社は後に酒田・北海道航路へ進出し、同40年(1907)には新潟-ウラジオストク直航便を始めた。

さらに2代喜十郎は、海運業で得た利益を元手として明治時代中期に土地集積を図って大地主となった。区会議員・市会議員・市参事会員と、政界でも要職を歴任した2代喜十郎は、明治37年(1904)3月9日、東京で客死した¹¹⁾。

4代齋藤喜十郎 2代喜十郎の後を継いだのは、その甥(弟・庫次郎の子)で養子となった庫吉(4代喜十郎)である。彼は沢海村の巨大地主である5代伊藤文吉の娘・ラクと結婚し、伊藤家と姻戚関係を結んだ。また、妹・タケを2代小澤七三郎に嫁がせている。

庫吉が表舞台に登場する明治20年代後半から、齋藤家は有価証券投資を積極的におこない、新潟の企業勃興に深く関与した¹²⁾。また、同29年(1896)には新潟商業会議所の設立発起人となり、議員に選出された¹³⁾。



図2-1 4代齋藤喜十郎(出典:『やまと錦』1916年)

さらに、庫吉はそれまでの海運業に加え、以下にみるように銀行業・化学工業にも進出した。明治43年(1910)には持株会社として齋藤合資会社を設立した。そして、自身と弟の庫造(1871~1913)・庫之助(1880~1938)・庫四郎(1883~1950)を系列企業の要職に配して、地方財閥としての体裁を整えていった。

銀行業 明治28年(1895)に市内の青年実業家を中心に新潟貯蓄銀行が設立される。この時、庫吉は資金集めにあたり、専務取締役のひとりとなった。

また、地主資本を支柱とする新潟銀行(第四国立銀行が改組)に対し、新潟市の商人らは新潟商業銀行を明治30年(1897)に開業させた。齋藤家はその中心となり、2代喜十郎と庫吉が専務取締役、姻戚の6代伊藤文吉・初代小澤七三郎らが取締役となった。

齋藤家の機関銀行となった同行は、堅実な経営ぶりを示した。大正6年(1917)、新潟銀行が第四銀行と改称すると、翌7年に新潟商業銀行は新潟銀行と改称し、4代喜十郎は頭取となった。その後、同10年(1921)に齋藤家は新潟銀行の貯蓄部を独立させ、新潟興業貯蓄銀行を設立する。専務取締役に庫四郎、取締役に4代喜十郎、監査役に庫之助が就任した¹⁴⁾。

化学工業 明治時代中期以降、新潟県内で石油採掘が相次ぐと、新潟市内にも製油所が増加した。これにともなって、石油の精製に必要な硫酸の需要が高まった。そのため、庫吉や鈴木久蔵らが明治29年(1896)に設立したのが新潟硫酸株式会社である。

当初、庫吉は取締役となり、商議員には庫造が名を連ねた。後に齋藤家の支配が強まり、大正13年(1924)には庫之助が社長となった。同社は関屋大川前に本社・工場を置き、明治40年(1907)からは過燐酸肥料の製造も開始した。1920年代の不況に苦しんだが、昭和9年(1934)に横浜工場、同12年に石山村に合成工場を完成させ、業績を拡大した¹⁵⁾。

本邸の焼失と再建 明治41年(1908)3月8日、古町通8番町から出火した大火で、東堀通7番町の齋藤家本邸は焼失した。4代喜十郎が直ちに再建した本邸には、新堀に並行して建てられた商家棟、土蔵2棟、東堀に面してL字型に建てられた接客棟があった。「燕喜館」と呼ばれたこの接客棟は、平成5年(1993)に市に寄贈され、白山公園内に移築再建されている。

政治家としての活動 大正4年(1915)、4代喜十郎は衆議院議員総選挙に中立を標榜して立候補した。実際は、早稲田大学賛助員(弟たちが早大出身)だったことから、大隈伯後援会¹⁶⁾の支援を受けた。これ

に当選した4代喜十郎は公友倶楽部に属した。

翌年、立憲同志会を中心に憲政会が結成され、公友倶楽部の多数がこれに参加する。4代喜十郎も憲政会に加わり、同新潟支部の顧問となった¹⁷⁾。それから間もなく衆議院が解散すると、彼は立候補せず任を終えた。

大正14年(1925)の貴族院多額納税議員互選では、憲政会公認で立候補して首位で当選、研究会に属して昭和7年(1932)までの1期を務めている¹⁸⁾。

齋藤家と自動車 大正7年(1918)、4代喜十郎は県内で初めて自家用自動車(シボレー)を所有し、許可番号第一号を得た。このナンバーを県庁が譲ってほしいと頼み込んでも、喜十郎は断ったと伝わる。

後に齋藤家は、大倉喜七郎が創立した日本自動車株式会社と特約し、その代理店として自動車販売・修繕などをおこなう齋藤本店自動車部を設立した¹⁹⁾。また、大正12年(1923)にはトラックを購入し、港から郵便局までの郵便輸送を開始した。これが新潟郵便輸送株式会社のルーツである²⁰⁾。

5代齋藤喜十郎 晩年、西大畑町の別邸で静養していた4代喜十郎は、昭和16年(1941)1月13日に死去した。後継として、弟で養子の庫四郎が5代喜十郎

を襲名する。庫四郎は早稲田大学在学中の明治40年(1907)、実業視察団の一員としてウラジオストク・樺太を訪問した。卒業後は新潟汽船²¹⁾、新潟興業貯蓄銀行、新潟硫酸の経営者となり、大正14(1925)年から昭和4年(1929)まで市議員も務めた。

5代喜十郎は新潟銀行頭取に就任したが、戦時統制が強まるなか、昭和18年(1943)に新潟銀行が、その翌年に新潟興業貯蓄銀行が、ライバルであった第四銀行に合併された。5代喜十郎は第四銀行の副頭取に就任したが、齋藤家は銀行業から大きく後退した²²⁾。

連合国軍による接收 昭和20年(1945)の敗戦後、新潟にも連合国軍が進駐し、市公会堂に新潟軍政部を置いた。その司令官官舎は当初、旭町の新津邸(現・新津記念館)が使用された。やがて、齋藤家別邸が司令官(軍政部長)公邸として使用されるようになる。その軍政部長コックス中佐(Coxe III, Louis H.)は、同24年(1949)秋に公邸で猟銃の盗難にあった²³⁾。

この接收期間中、別邸の建物・庭園とも相当の改変が加えられたと思われるが、その詳細は不明である。

5代喜十郎没後 大地主でもあった齋藤家は戦後、所有する多くの田畑を農地改革で失った。さらに昭和25年(1950)9月10日、5代喜十郎が死去した。そ

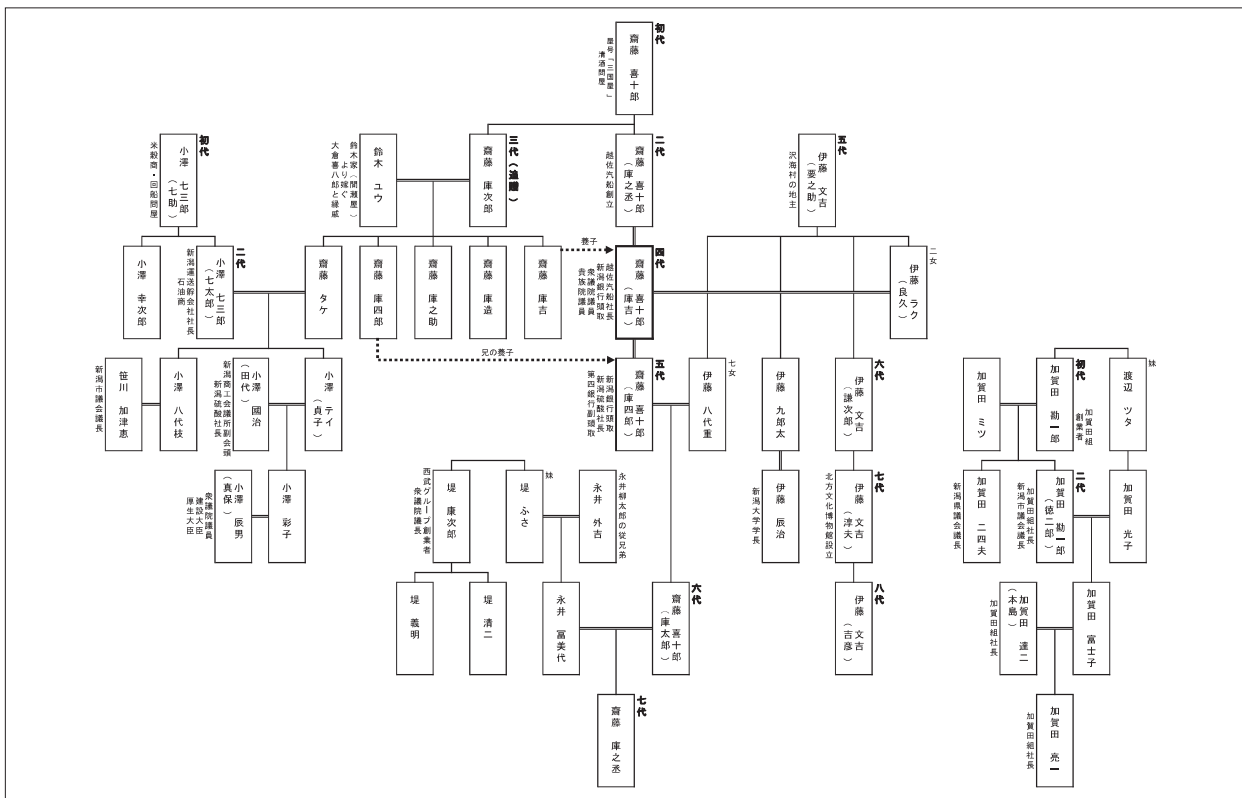


図2-2 旧齋藤家別邸関係者系図

の長男・庫太郎（1915～1983）が6代喜十郎を襲名したが、当時の金額で二千数百万円の相続税が課税されたという²⁴⁾。戦後の混乱の中で、齋藤家がこの別邸を維持するのは難しくなっていた。

加賀田邸

2代加賀田勘一郎 昭和28年（1953）、齋藤家からこの別邸を買い取ったのが、2代加賀田勘一郎（徳二郎、1900～1978）である。彼は、同14年（1939）に父・初代勘一郎の後を継ぎ、建設会社・加賀田組の組長となった。同27年（1952）には同組を株式会社とし、社長に就任している。また、同45年（1970）には新潟県建設業協会会長に就任した。

彼は加賀田組の他にも、新潟スバル自動車・新潟開発観光（新潟ビーチセンター）・新潟プロセス印刷などの経営に携わっていた。また、昭和19年（1944）からは市議会議員となり、土木水道常任委員会委員長・副議長を経て、同29年（1954）から1年間、市議会議長を務めた。

また、2代勘一郎の弟・二四夫（1912～1994）は、昭和34年（1959）に市議会議員となり、同38年（1963）には県議会議員に当選、同56年（1981）からは県議会議長を務めている。



図2-3 加賀田邸を訪れた川端康成（中央）と2代加賀田勘一郎（右）（加賀田亮一氏所蔵）

2代勘一郎の趣味 2代勘一郎の趣味は囲碁と骨董収集であった。囲碁は五段の腕前で、昭和28年（1953）に日本棋院新潟支部長となり、同30年（1955）には、第10期本因坊戦第3局の会場に自邸を提供している。

骨董収集の関係では、昭和39年（1964）に新潟県文化財保護連盟の副会長となり、2年後には会長となった。また、日本陶磁協会理事となり、同41年（1966）には新潟県支部長に就任した。そのため、加賀田邸では定期的に同支部の茶会が催されていた。

また、加賀田家は裏千家の茶道に親しみ、14代家元（淡々斎、1893～1964）から茶室を「松鼓庵」と命名してもらったという。2代勘一郎の妻・光子が始めた茶会「松鼓会」は、その長女・富士子に受け継がれた。**加賀田達二** 昭和52年（1977）、2代勘一郎は長女・富士子の夫である加賀田達二（1918～1997）に社長職を譲り、自らは社主となった。彼は数年前から体調を崩しており、翌年10月24日に死去した。

後を継いだ達二は、新潟医科大学学長を務めた本島一郎の次男である。昭和17年（1942）に東京帝国大学工学部を卒業後、海軍技術士官となった。復員後、加賀田富士子と結婚して加賀田組に入社した。達二は同52年から平成8年（1996）まで加賀田組社長を務め、昭和57年（1982）には新潟県建設業協会会長に就任している。義父と同様に囲碁を趣味とした。

達二・富士子夫妻は、昭和57年に主屋東側を増改築し、この邸宅に移り住むようになった。彼らの長男である加賀田亮一氏（1958～）も平成12年（2000）から同14年まで加賀田組の社長を務めている²⁵⁾。

新潟市による公有化へ

保存に向けた市民運動 平成17年（2005）に加賀田組は自主再建のため、会社分割によって不動産事業を分離した。これにより、加賀田邸（旧齋藤家別邸）の所有は有限会社アイ・ランド・プラスに移った。このことを契機に、市民有志は「旧齋藤家夏の別邸の保存を願う市民の会」（現・旧齋藤家別邸の会）を結成した。同会は保存に向けた署名・募金運動、別邸の一般公開（全3回）、市議会への請願をおこなった。そして、市長宛に26,379名分の署名簿が提出された。以上に呼応して市議会も別邸保存の請願を採択した²⁶⁾。

新潟市による公有化 以上から、公有化の有効性とそれに対する市民の広範な支持の存在を確認した新潟市は、旧齋藤家別邸の歴史的・文化的価値や立地特性を活かし、公共的な利用に供するため、平成21年（2009）

にこれを公有化した。同23年(2011)、新潟市旧齋藤家別邸条例を制定し、公の施設としている。

補注および引用文献

- 1) 砂丘への植林については、『新・新潟歴史双書6 新潟砂丘』(新潟市、2011年)を参照。
- 2) 新潟市『新潟市史 資料編2 近世I』1990年、pp.367-369。
- 3) 『新潟新聞』1893年8月15日、同年12月23日、1894年1月5日、同年3月11日。
- 4) 山川健(松南)『新潟』新潟公友社、1912年、p.346。
- 5) 週刊紙『新潟公友』(新潟市立中央図書館所蔵)には、島村医院の広告がほぼ毎号掲載されている。439号(1912年12月1日)までは「南浜通二番町」とあるが、441号(同年12月15日)から「西大畑町(元嶋清旅館跡)」と所在が変わり、454号(1913年3月16日)以降は「新潟嶋村医院」「庭園内ニ閑静ナル療養室アリ」と記されている。その後、624号(1916年6月25日)まで広告掲載が確認できる(その後の号は現存せず不明)。
- 6) 富樫悌三『新潟県総攬』新潟社、1916年、p.645。
- 7) 『坂口安吾全集 04』筑摩書房、1998年、p.263。
- 8) 平成18年(2006)、安吾の生誕100周年を記念して、生家跡に近い新潟大神宮境内に「坂口安吾生誕碑」が建立されている。
- 9) 前田穰「近代における新潟市の代表的事業家たち」(『市史にいがた』4、新潟市、1989年)や平成の『新潟市史』(新潟市、1990年～1998年)では、齋藤喜十郎家、鍵富三作家、新潟白勢家を挙げ、『新潟開港百年史』(新潟市、1969年)では山三(齋藤喜十郎)、鍵三(鍵富三作)、田三(田代三吉、海産物商・北洋漁業家)を挙げる。
- 10) 『新潟新聞』1890年11月13日、1891年3月7日。
- 11) 以上、2代喜十郎の略歴については、風間正太郎『船江遺芳録』(1914年、1992年復刻) pp.279-281を参照。
- 12) 中西聡『海の富豪の資本主義』名古屋大学出版会、2009年、pp.231-239。
- 13) 『新潟商工会議所六十年史』新潟商工会議所、1958年、p.65,71。
- 14) 以上、齋藤家の銀行業については、『第四銀行百年史』(株式会社第四銀行、1974年)を参照。
- 15) 『新潟硫酸株式会社五十周年記念誌』(新潟硫酸株式会社、1946年)。その後も庫四郎(5代喜十郎)・小澤國治・6代喜十郎と齋藤家関係者が社長を務めた同社は、昭和47年(1972)に日東硫曹と合併してサン化学と改称、同58年(1983)には東北肥料と合併し、現在はコープケミカル株式会社となっている。
- 16) 大正3年(1914)に組閣した大隈重信を支援する早大関係者の組織。
- 17) 永木千代治『新潟県政党史』(第二版)新潟県政党史刊行会、1962年、pp.425-428。
- 18) 永木、前掲書、pp.462-463。
- 19) 『新潟商工会議所六十年史』p.257。
- 20) 関口五郎(新潟郵便輸送株式会社取締役)「わが社のあゆみ」新潟郵便輸送株式会社、発行年不詳、p.4。
- 21) 大正7年(1918)に越佐汽船が改称。佐渡商船との熾烈なサービス競争の末、昭和6年(1931)に同社に買収され、翌年に佐渡汽船となった。
- 22) 『第四銀行百年史』参照。
- 23) 新潟日報社編『新・県民間書き帳』新潟日報事業社、1979年、pp.397-403。
- 24) さかい・せいぎ『新潟人物読本』新潟商工会議所内記念事業会、1953年、p.124。
- 25) 以上、加賀田組の歴史については、『加賀田組100年史』(株式会社加賀田組、1996年)、『旧齋藤家別邸基本調査報告書』(新潟市、2011年)を参照。
- 26) この間の経過については、旧齋藤家別邸の会公式ブログ(<http://savesaito.exblog.jp/>)や同会副代表である大倉宏氏の「怒った顔——新潟市・旧齋藤家別邸の佐藤紫煙の絵」(一関市博物館『佐藤紫煙 幻の花鳥画』図録、2010年)を参照されたい。

謝辞

なお、本稿の作成にあたっては、行形和也氏と新潟ハイカラ文庫(<http://www.actros.sakura.ne.jp/>)の横木剛氏から種々の御教示をいただいた。記して謝意を表したい。

第2節 別荘の造営と庭園の築造

別邸造営に至る経緯 旧齋藤家別邸は4代齋藤喜十郎が大正時代に造営した別荘である。それ以前は、明治10年(1877)以前から同26年(1893)まで営業していた料理屋「堀田楼(堀田屋)」(図2-4)、それを買収して移転・開業した料理屋「島清館」(図2-5)、大正元年(1912)から齋藤家による別邸造営が始まるまでの間、その跡地で開業していた島村信司の医院が存在し、いずれも庭園の美しさを売りにしていたことが確認できる。堀田楼庭園の当時の状況は、「新潟堀田楼真景」から概要が把握できる。道路に面して二柱門が開き、砂丘後背の平場に2階建て切妻造の建物、敷地西側には平入の建物が3棟、敷地東側の低地から斜面中腹にかけて寄棟造の建物2棟、宝形の建物2棟が建つ。低地のほぼ中央には四阿が置かれ、砂丘上部の平場には、間口10間ほどの建物が建ち、その背後にも建物が確認される。庭園は、斜面を利用した溪流が低地の池に流れ込み、池の汀線には主に丸太杭が使用され、土橋が架かる。植栽樹は砂防林と思しきクロマツを主体に、西側の竹林、二柱門脇のウメ、池岸にはシュロ、シダレヤナギなどが確認できる。

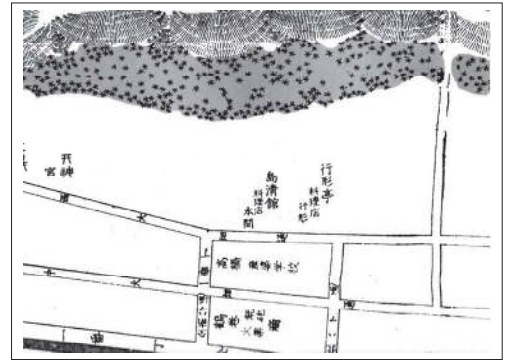


図2-5 「新潟市商業家明細全図」(1896年)

齋藤喜十郎は、大正5年(1916)から別邸敷地の購入を開始している。しかし、どのような経緯で土地を所有するようになったか、現在の施設(庭園・建物)がそれ以前のものとの程度の関係性を持っていたかは資料が乏しく、詳細は不明である。ここでは、社会背景を踏まえながら、別荘造営の理由を検討したい。
社会背景と齋藤喜十郎 明治時代も後期を迎えると新潟市の商業は港湾整備の遅れによる取引の不振や相次ぐ大火、水害によって全体として発展性に乏しい状態が続いた。その中心であった回船問屋など前時代的な商業形態は全国的な郵便や電信などの通信網や鉄道

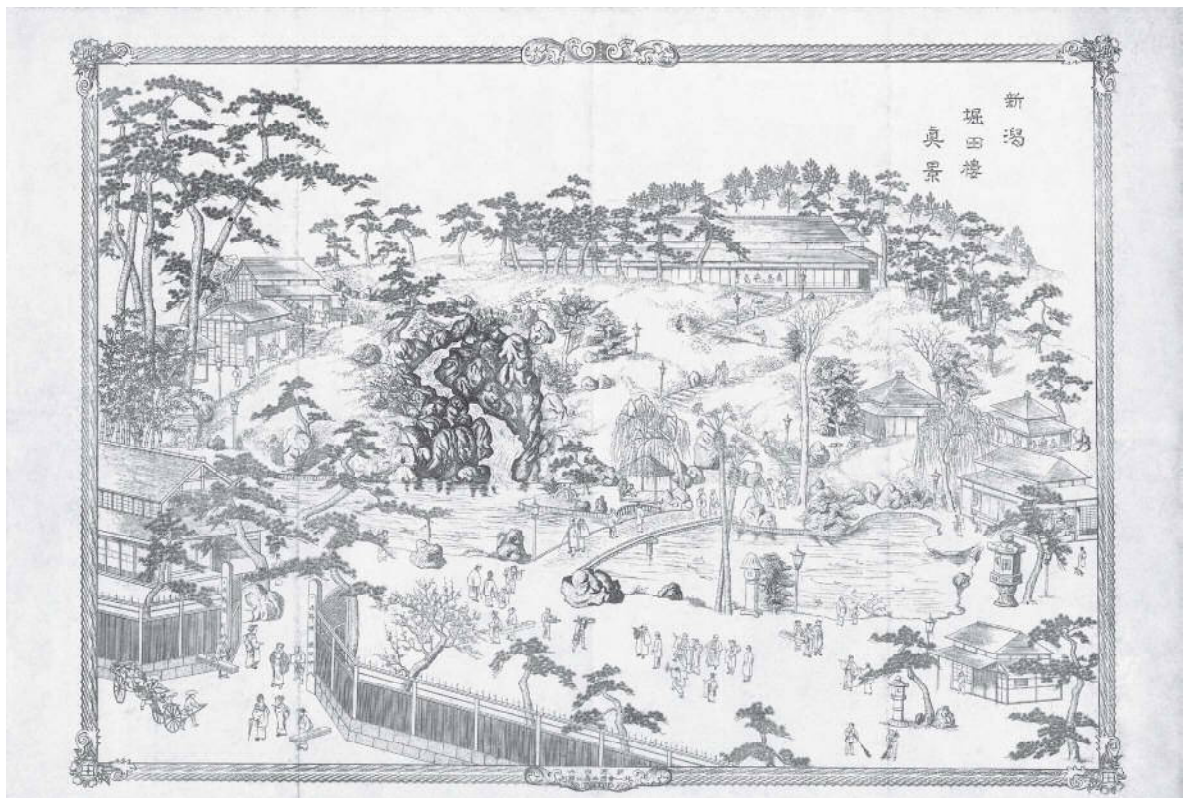


図2-4 「新潟堀田楼真景」(年不詳)

など交通網の発達で地域間格差がなくなり、商売が難しくなっていた。明治17年(1884)、県内各地の政界、経済界の有識者が集まる鉄道敷設会議が開催され、白勢彦次郎、鍵富三作、2代齋藤喜十郎、荒川太二らが出席。直江津から県庁所在地で商業の中心である新潟を経て軍施設のある新発田まで鉄道を敷設するかどうかを議論している。このように鉄道網が主要な地域で国内輸送を担うようになり、新潟市内の回船問屋は明治末には実質的に終わりを迎えた。

明治時代、新潟市の実業家たちは社会、経済、政治などの分野で重要な地位を占めており、その地位を確保し、与えられた役割を果たすために情報交換や親睦の場を求めるため、北越興商会や商話会といった社交団体を結成した。明治29年に設立された新潟商業会議所には、北越興商会の会員をはじめ、市内の実業界の中心人物が名を連ねた。議員の顔触れは明治36年(1903)の全員改選によって大きく変わり、役員の一翼を担う常議員の中に鍵富、白勢、齋藤家の関係者が進出するなど新潟財界の実力者が商業会議所を取り仕切る傾向が強まっていった。齋藤家は幕末から酒類販売、海運、金融などを主流とし、明治33年(1900)に設立された新潟回船業組合に加盟し、貨物の扱いや倉庫業に携わっていたが、徐々に河川交通、海運、銀行、化学、倉庫など幅広く出資していった。こうして齋藤家は、古いタイプの商業資本家から脱皮し、社会に沿う形で経営の近代化を遂げていった。加えて4代齋藤喜十郎は、衆議院議員・貴族院議員となり政治家としても幅広く活動していた。

いずれにせよ、社会全般の機運が新時代の商業形態を目指したなかで、その中心的な役割を担った4代齋藤喜十郎が別邸を当地に構えたことは、別邸を自らの事業活動を発展させるツールとして、情報交換や親睦の場として、また新しい人間関係の構築や自らが心を落ち着かせる空間として大いに利用することを意図した結果であろうと考えられる。

富澤信明氏への聞き取り調査 齋藤家別邸の築造記録(建物・庭園)の所有者で新潟大学名誉教授の富澤信明氏に短時間ではあったがその閲覧を許され、聞き取りをおこなった。

史料は①『大正九年 西大畑別荘 建物及庭園築造関係綴』と②『大正六年 建築材料其他價格調 齋藤□□(判読不能)』の2冊があり、①は当時、齋藤家の番頭だった五十嵐庄作がまとめた築造工事一切の帳簿で建物と庭園に分かれ、職人の手間賃、仕入れ年月日、内容、

数量、単価、金額などが詳細に記録されている。②は運搬その他の送付伝票、領収書、書簡などを綴ったものである(以下、上記2冊を「富澤史料」と呼ぶ)。

主な聞き取り内容を以下にまとめた。

記録されている期間 建築資材に関しては大正5年(1916)8月27日より大正8年(1919)頃までの記載で月は不明、建築完了年は記録にない。庭園に関しては大正6年(1917)4月2日より大正9年(1920)8月頃までの記載である。

工事費 建築費が87,094円38銭8厘で、築庭費が46,120円37銭で合計133,217円75銭8厘である。全体工事費に占める築庭費の割合は約35%である。

手間賃と職人 大工の手間賃80銭～1円、左官の手間賃88銭、石工の手間賃80銭～90銭、庭師の手間賃3円との記載があり、庭師の手間が格段に高い。庭師名の記載として政吉(延べ日数168人、期間:5月23日～11月28日)、若三郎(延べ日数67人)、清吉(延べ日数40人)がある。

庭石と灯籠 海老ヶ折石は記載が多く、坂本伊助からたびたび買い入れている。次に多いのが筑波石で筑波駅、秋葉原駅、巣鴨駅からいずれも白山駅に送っており、その送り状とともに松本亀吉が齋藤喜十郎に宛てた書簡も多数存在している。他の庭石としては伊予青石、紀州青石、鞍馬石や鶴亀石などの記載があり、2石500円、運搬代8石28円など詳細に記録されている。浩養園(現在の東京都墨田区に所在した沼津藩主水野忠成(ただあきら)の屋敷の庭園で、明治には「浩養園」と呼ばれていた)の売立会で、松本亀吉が青石、東石、大石などを落札して東武鉄道浅草駅から当地に送っている。雪見灯籠、稲田石など灯籠や石塔の記載も多く、大灯籠1基1,500円、岡崎から灯籠8基、稲田からも庭石を仕入れて上大川前通の石六(現石六石材店)、倉田六治で灯籠に加工した様子も窺い知れる。その他十三重塔・火袋付き2,000円や十三重塔も800円で購入している。

庭木 大松12円、かえで4円、つつじは吉田長太郎から仕入れ、プラタナスは20本で35円、芝草110坪10円、チャボ菊、野菊など購入の記載がある。

なお上記の富澤史料は、別邸の建設過程を知るうえで貴重なものであり、今後、詳細な調査が望まれる。

主要参考文献および補注

- ・新潟市『新潟市史 通史編3 近代(上)』1996年。
- ・新潟市『新潟市史 通史編4 近代(下)』1997年。